

生の啓蒙と常識過程 —— グルトヴィ「哲学・学芸」の射程

09.11.8 唯物論研究協会大会(金沢大学)報告資料: 小池 直人(文責)

はじめに

あ) 歴史の転換と知的組織の転換

コントの論点: フランス革命後の社会の再組織にあたって、知の神学的組織(絶対王政)と形而上学的組織(個人の活動を解放し、政府の役割を極小化する批判原理)との両極を克服する課題を提起し、実証科学に基づく、有機的な社会の組織化のための建設的理論を提起(コント 1822)。「社会」を課題とした産業社会論、エリート理論。この問題性を受け止め批判しながら知の民主主義を確立する方向はどうあるべきか。 Cf. ヘーゲル、科学的社会主義・・・

い) オルタナティヴィな近代知の検討

北欧型近代文化の初発に多大な影響を与えたグルトヴィ(Nikolaj Frederik Severin Grundtvig, 1783-1872)の「生の啓蒙」(Livs-Oplysning)、「民属・民衆的啓蒙」(forkelig Oplysning)、「哲学・学芸」(Vidskab)等の意義を解明することで、現代的な知の組織化、知のエリート主義から民主主義(福祉国家の論理を含む)への移行の論理を探ってみたい。

う) グルトヴィ研究にかんして

- ・小国デンマークの思想家: グルトヴィ協会を中心とした丁抹内研究のほか、他国に知られることが少なかった。近年、社会開発論、「ソクラテス-グルトヴィ・プログラム」・・・、英訳テキストの刊行。→体系を秘めた「詩人」、その全体が解釈者によって構成できる可能性。
- ・又エ的な思想家: 保守的、ナショナリスト、ルター派キリスト者、自由主義者、親社会的・・・
- ・現在までの邦語研究: 伝記『グルトヴィ』の和訳(Koch; Thaning)、ホイスコレーや社会教育(清水他; Korsgaard 1997)、邦訳テキスト:『世界における人間』(G.1817a; 小池 2009a)・・・。報告者は『北欧神話記』序文(G.1832)、『国家的啓蒙』(G.1834)、雑誌『デーの防壁』(1816-19)などの哲学的諸論考を検討しているが、端緒的。
→ここでは現段階での途中報告(小池 2009b)。

え) 本報告の内容: 「生の啓蒙」に規定される「哲学・学芸」の基本性格、射程の描出

自我のアイデンティティの探求、人間の完成可能性の逆説と径路の再見

cf. 「啓蒙の弁証法」(アドルノ・ホルクハイマー) vs. 「弁証法的啓蒙」(戸坂)、ハーバマス

①「啓蒙」批判、②ロマン主義の止揚、③常識過程、④知の歴史・社会的存在論

(一) 啓蒙の有機体論モデル、健康モデル

あ) 理性の啓蒙と生の啓蒙

- ・「自惚れた知性」「幼児の学問」→成長させるには？

「理性や知性が想像力や感情に劣らず迷信や夢想、熱狂に陥るのは明らかであり、・・・それらの錯誤の全体が啓蒙の輝きである。」(G. 1834, s.32)

「今、この啓蒙を権力によっても一掃することも、啓蒙の拡大普及を阻止することもまったく不可能である。なぜなら啓蒙は民衆を抑圧する知識情報に発するものではなく、内的な発達においても外部からの情報伝達においても、(これまでの仕方でも・・・筆者)到来しているのではないからである。・・・それは学的教養のある人々だけでなく、読むことも書くこともできない民衆のもとに押し寄せてきている。」(G. 1934)

い) 理性の啓蒙への両義的態度

- 有機体論的モデル(健康モデル)への止揚過程:「浅薄な啓蒙」から「徹底的な啓蒙」へ
「予防接種が本物であれば、それはもつとも有害な種痘でさえ、周知のように用意の整った人々によって取り組まれる。事情は自惚れ、自尊心、自立性への食欲な姿勢全体にかんしても種痘の場合と同様である。つまり、諸々の種痘の状態が、それらの諸性質がすでに撲滅不可能になっていれば免疫移植は有益でない。だから、免疫移植が行われるのは早ければ早いほどよい。」(ibid.)
- 「徹底的啓蒙」としての生の啓蒙
啓蒙の機械論モデルから有機体論的モデルへ
啓蒙を理性知(科学、分析知)で完結させず、有機体論的過程においてとらえる
「国家的啓蒙」(statsmæssig Oplysning)→「民属・民衆的啓蒙」(folkelig Oplysning)
仏革命を媒介とした「ポピュラーなもの」、「民属・民衆的一体性」(Folkelighed)理念
cf. コーポラティズムにたいするネオ・コーポラティズム的な啓蒙！？

(二) 「自然」から「精神」へ

あ) シェリングと文化的黄金期のデンマーク

シュテフェンス、アンデルセン、エレンシュレアー、キルケゴール、エルステズ・・・
社会的教養層(リーマン、モンラッツ、クラウゼンら)のカント、ヘーゲル主義

•シェリング的自然・世界解釈(「自然における精神」)の受容

「自然哲学は酵母とみなされる。そこで自然哲学は摂理の支配のもとにあつて、まったくよいことを達成したのであり、おそらくキリスト教に帰還する道を均した。自然哲学は、人間における詩的なものの反作用、すべてを解体する知性使用にたいする、歪んではいるが力強い反作用である・・・。」(G. 1812)

→自然界の総体は、①無機的自然界、②植物界、③動物界、④理性的自己意識をもつ人間界の四層に区別され、かつ連続させられており、意識性のポテンシャル(Potenz)の差異が、人間を頂点とした自然界全体を位階的に秩序づける(G.1817a)。

•信仰と知的領域との区別

シェリングからの「直観」概念の受容

「自然主義者は信仰を、たしかにキリスト的直観の諸々の神的働きを無化することはできなかつたが、それらを大いに弱体化した・・・。」(ibid.)

自然主義者は、信仰と分析科学の中項となる「知」の領域の可能性を提起し、「学校」を共にしうる。学校の保持者としてのシュテフェンス(Koch 1959)。

い) シェリング的との決別(Scharling 1947)

•自然と精神(自我)との(絶対的)同一性への異議

「自然主義者は、古い人間性が治癒回復されうるし、そうすべきであると主張するにちがいない。・・・したがって、キリスト者であることの意味は[他力的に・・・筆者]キリストを身に纏う必要はまったくなく、むしろ己の内で精神的にキリストを身に刻むこと、彼を我々すべてが浄化され、明瞭化されるべき神的範型として身に刻むこと、すなわち我々は神の子どもとして自らを高めるところの、人間の子どものとしてキリストを身に刻むこと、このことだけだということになる。」(ibid., s.26)

→自力主義、超人主義への異議

•非現実主義、非共同主義への異議

絶対自我から意識内外にある共同の普遍的自我→「根本意思」(Grund-Villie) = 「良識

(共通見識) (Samvittighed) = 「真理」 (Sandhed) への移動 (G.1817a)

う) 第三項としての「直観」 (Anskuelse)

・「モーゼ・キリスト的直観」 (mosaisk-kristelig Anskuelse) : 道標、「北極星」

「信仰」——「直観」——「(科学)知」あるいは「事実知」

「次に述べることからをすんなり理解できないなら、キリスト者であれ異教徒であれ、精神の輝きを宿した歴史家であることはできない。その二つのことがらとは、ローマの時代に驚くべき仕方人間性を繋ぐ鎖を断ち切ったのが・・・卓越したキリスト的直観であったこと、ルターによる再生においてローマ教皇を死の病に導いたのが、同じキリスト的直観であったことである。[第二に、]新たな民衆・民衆世界の思考過程と教養形成にたいして、その世界の哲学・学芸にたいして、旧世界に欠落していた普遍・人間的な刻印を与えたのはその直観だけだということである。」 (G. 1832)

「キリスト者の信仰に結びついたキリスト的なもの」 (ibid) ではなく、キリスト者であると否にかかわらず、現世にかんする「キリスト的な」知すなわち「直観」。

・「神の実験」 (guddommeligt Experiment) としての人間

「すべての賢明な学校制度は進歩的な啓蒙と教養形成とを意図して設計されねばならない。・・・人間はまずもって他の動物のものまねを運命づけられた猿ではないし、さらに、世界の終末まで自己自身を模倣することを運命づけられた猿でもない。人間は数限りない世代を通じて神的な諸力が披瀝され、展開され、解明されるはずの比類のない素晴らしい被造物である。人間は、どのように精神と塵とが浸透しあい、共通する神的意識のなかで開示されるかを示す神の実験である。」 (ibid.)

え) 「(吟唱) 詩人」 (Skjald/ Digter)

・吟唱詩人 (スカルド詩人) : 歴史的、媒介的、予言的な役割 (Koch 1959; G. 1820)

恐れおののけ、おお吟唱詩人よ	君の条件として、君の天職として
君自身を通じて描かれねばならない	君が生の泉の中に見たものを
君を通じてより広い世界に	バラの香りは広がるだろう
君は生の状況の斥候である	君は主の協働者である

→吟唱詩人は生の歴史的状況を直観し、不分明な仕方で告知

・直観の展開過程: 予感 (Anelse) の解明 (Forklaring)、共通理解へ

(三) 解明の端緒 (および目的) としての経験と常識

あ) 実践的経験、(人) 生の経験

「我々は十分に経験しないものを概念把握しないということ、そうした十分な経験が人間にとって真の哲学・学芸への唯一の道であるということ、学問は常識、健全な人間知性の精神的使用に他ならないということ・・・が帰結する。」 (G. 1817b)

・経験を媒介する「手」 (Hånd) と「口」 (Mund)

「手と口、それがすべてである」

しかし、それらは諸部分として

みごとに相互作用する (G. 1857, s.213)。

・「手」の役割

「我々がまずこのようにして感性的活動を考察するとき、手¹がすぐに我々の注意を引くにちがいない。手はたんにある種の自立性の境界にあって、ある仕方では身体とは違って、ある距離において事物が感覚されるよう促すことができ、身体全体を感覚することのできる感覚器官であるだけでなく、最も発達した感

覚器官、それなくして感性的活動が完成されず、十分な確実性や一定の表象がえられない感覚器官である。というのも、触れることによる暗く不分明な触覚感情とともにはじまる感性的活動は、手においてもっとも明瞭で、もっともはっきりした触覚感情、活動的になった触覚感情、感^じ触^れで終結する。他の感覚すべてが外的な事物を特徴づけるように見ることができるが、そこには現実・活動的なものはなく、むしろ手^で把握^されたものこそ、身体そのものと同様に現実・活動的に現在するのである。」(G.1817a)

→外的世界の情報が「手」を介して「確実」に受容されて「確信」に転化し、また「手」を介して内的確信が外化される。 → 19世紀型「(農業)労働」の基礎経験

・「生けることば」(det levende ord)

経験と伝達との不可分性 → 「生けることば(det levende Ord)」(=口)

この「ことば」は、普遍的記号でも学術言語(ラテン語)でもなく、母語

「ことば」は「あらゆる観念論にたいする、つまり身体的なもののもつ理性的現実のいかなる否定にたいしても不動の壁である。」(G.1817b)

「経験(という領域)があるにもかかわらず、ドイツ的な諸々の福音の探求全体は、それらが学ばれ、追求される前に、理解され概念把握されねばならない。」(G.1848)

→ことば(母語)は、身体に支えられた経験を交流させ、共通理解=共通感覚をもたらす。

学術言語と思弁哲学、理性神学は観念論的言語 cf. Empiri と Erfaring との相違
い)「常識の法廷」(den sunde Menneske-Forstands Domstoel)

・「普遍的人間知性」(almindelig Mennesket-Forstand)としての「常識」

「常識、つまり健全な人間理性が真の学問の必然的条件であるだけでなく、そのような学問を生むことのできる唯一のものであることは明らかである。」(G.1817b)

→学術世界の特権性の否定、社会的過程への包摂=知の歴史・社会的存在論への展開
cf. 戸坂潤「常識水準」(戸坂 1935)、グルントヴィと戸坂の差異も。

・二重の高等教育構想: 「ローカルリッジ」の意義づけ

「大学」(Skolen for Lyst)と「ホイスコーレ」(Skolen for Livet)

「私が心のうちに保持していたのは、民衆的なものとしての啓蒙や育成を卓越した学術的な啓蒙や教育に対置するのではなく、学的教養層の光と民衆の生とを架橋することで、両者は相互に理解しあうことを学ぶことができることだと新たに印刷物でいわれている。しかしそれは著しい誤解である。というのも、たしかに私の最初の努力はある仕方学術的教養層と非教養層とを架橋することで、彼らが啓蒙と教養形成のために相互に共通のことばで働きかけあうことができるようにすることだった。しかし、そうしたことは、共通の啓蒙のための相互作用がそこで起こらなければ無益なものになるだろうが、そのような相互作用はまさに、私が共通の母語を用いるホイスコーレで期待したものだからである。」(G.1871)

・「絶対知」の不可能性と「哲学・学芸」の可能性

「想像力」(Indbildningskraft)の決定的役割

「人間の生をその自然的小および歴史的条件の全体において解明することはここに掲げる目標であり、そのことが数学者から詩人にいたるまで、ことばの収集家から思想の集積家にいたるまでのあらゆる熟達した人々の努力を統一することはきつとわかるだろう。こうして普遍史・・・この偉大なるアラディンの城は地上においては最後の窓を備えることができない。だが付言すれば、たとえそうであっても、その城はすべての準備が整ったときには、熱心で献身的な精神によって一夜にして築かれるだろう。」(G.1832)

→知とイメージとの相即、「学問」と学芸(詩情、絵画、物語・・・)との相即。(学問という)
「アラディンの城」は地上においては最後の窓を備えることができない(ibid.)。

う) 普遍史的哲学・学芸 (universal-historisk Vidskab)

- ・「学問」(Videnskabelighed) ……理念としての(客観的)「確実性」(Sikkerhed)
歴史的に、直観的、創造的な知の世界を理性に向けて「解明」(Forklaring)する。
- ・「哲学・学芸」(Vidskab) ……理念としての「確信」(Vidshed)
「我々は十分に経験しないものを概念把握しないということ、そうした十分な経験が人間にとって真の哲学・学芸への唯一の道であるということ……が帰結する。」(G.1817b)
所与の知的確実性を主体へと媒介し、さらに触発され真理へ創造、解明をめざす過程。
- ・真、善、美にかかわる「神の実験」
理論と実践／直観と制作(poiēsis)
cf. 人間の歴史的創造行為は「経験的美学(empirisk Æstetik)」(G.1817a)
「時間の全体は歴史と呼ばれなければならない。というのは、時間は本来、どこまでどのように魂と身体とが共属し、真理と美が共属しあうかという問いとして存立するからである。」(ibid.)

四 「民属・民衆性」と社会的存在論の未完

あ) 「民属・民衆性」(Fokelighed)の観念

「国民的なもの」と区別された「民属・民衆的一体的なもの」:フランス革命の理念の具体化
「だがしかし、その民属・民衆性は近代においては人格的自惚れにおいて危険な敵をもっている。自惚れはすべての人間的な心の自然な紐帯から切り離され、あるときはさらにいっそう背伸びして、最良の国内性と民衆性よりはるかに高貴であるはずの世界市民であることを鼻にかけ、あるときはすべての人間性を、したがって人間の自然な関係をも告発すべしとしたキリスト教に訴え、最後に、個人的人間が、彼の誇りと独立性を邪魔するものを取り除くことにおいて到達することのできる啓蒙と賢明さを自分の利点として偶像化することで、身を飾るのである。」(G. 1851)

→抽象的個人主義への対抗の危険と民衆の(ナショナルな枠内での)平等な紐帯

い) 民属・民衆性と福祉国家との相補性

- ・福祉国家のガヴァナンスに不可欠な「協議社会」(Forhandlingssamfund) (小池・西 2007)
- ・協議社会を可能にする制度
諸個人が対等平等に協議社会(知の存在論)に参画するには、政治的・経済的条件の整備が必要になるが、グルントヴィはアイデアは前者の条件を示唆したものの、その具体化のための後者の経済条件を十分に考察しておらず、とくに経済的見解については自由主義の範囲にとどまった。グルントヴィ主義はリバタリアンの側面(Cambell 2006)。現代的に見ると、福祉国家建設のなかでの協議社会(ネオコーポラティズム、国家の中心風化、利用者民主主義……)の制度展開(Pedersen 1993; Cambell 2006 小池・西 2007)と、社会的諸権利(生存、教育、社会文化権)の伸長による資源保障が、グルントヴィ「哲学・学芸」のリアリティを確保する。 Cf. 「グルントヴィ」と「マルクス」との関連

おわりに

- ・「生の啓蒙」の展開: ①「常識過程」「常識の法廷」論を打ち出し、社会生活の内部に二元的(あるいは三元的)な知の相互作用を埋め込む。②その土台としての福祉国家の発見・発達
③近代知の認識論はコミュニケーション論を越え、歴史・社会的存在論へと結晶。

・ただしグローバル資本主義の浸透と小国ナショナリズムの制約 (Cambell 2006)

参考文献

- Birkelund, R. (1999), Det grundtvigske og det rationalistiske oplysningsbegreb, i: *Livsoplysning*, Kvan.
- — (2001), Grundtvig og Demokratiet: Om oplysning, dannelse og demokrati i: O. Korsgaard(red.), *Poetisk demokrati: Om personlig dannelse og samfundsdannelse*, Gads Forlag.
- Campbell, J. L. et al.(2006), *National Identity and Varieties of Capitalism The Danish Experience*, McGill-Queen's University Press.
- コント, A. (1822) 「社会再組織のための科学的作業のプラン」(霧生和夫訳『世界の名著、コント、スペンサー』中央公論社、所収)。
- Grundtvig, N. F. S. (1810), Nytaarsnat, i: H. Begtrup(ud.), *N. F. S. Grundtvigs Udvalgte Skrifter*, Bd.1, Gyldendal.
- — (1817a), *Om Mennesket i Verden*, Poul Kristensen. 小池直人訳『世界における人間』(名古屋大学社会文化形成研究会『社会文化形成』別冊1、二〇〇九年)。
- — (1817b), Om Videnskabeligheds Forhold til Erfaring og sund Menneske Forstand, i: *Udvalgte Skrifter*, Bd.2, Gyldendal.
- — (1832), Nordens Mytologi, i: Kristensen, G. og H. Koch(ud.), *N. F. S. Grundtvig Værker i Udvalg*, Bd.4., Gyldendal.
- — (1834), *Statsmæssig Oplysning*, Nyt Nordisk Forlag Arnord Busck, 1983.
- — (1847), Lykoensknning til Danmark med Det Danske Dummerhoved og Den Danske Højskole, i: *N. F. S. Grundtvig Værker i Udvalg*. Bd.4. Gyldendal.
- — (1851), Danskeren IV, i: *Udvalgte Skrifter*, Bd.9.
- — (1857), Nyårsdagen, i: S. Grundtvig(ud.), *N. F. S. Grundtvig Poetiske Skrifter*, Bd.8.
- — (1871), 2. november 1871, i: *Taler paa Marielyst Højskole 1856-71*, Gyldendal.
- Knudsen, T. (1993), *Den Danske Stat i Europa*, Jurist- og Økonomforbundets Forlag.
- Koch, H. (1959), *N. F. S. Grundtvig*, Gyldendal.小池直人訳『グルントヴィ』(風媒社)。
- 小池直人(2007)「コックのグルントヴィ論」(コック『グルントヴィ』所収)。
- — (2008)「生の啓蒙と環境保全——グルントヴィの思想的射程」(環境思想・環境教育研究会『環境思想・環境教育研究』第二号)。
- — (2009a)『世界における人間』訳者解題」(『社会文化形成』別冊1)。
- — (2009b)「生の啓蒙と常識過程——グルントヴィ『哲学・学芸』の基本性格」(『社会文化形成』別冊1)。
- 小池直人／西英子 (2007)『福祉国家デンマークのまちづくり』(かもがわ出版)。
- Korsgaard, O.(1993), Hånd og Mund – Det er det Hele, i: *Kognition og Pædagogik*, FL's Fællestrykkeri, Aarhus Universitet.
- — (1997), *Kampen om Lyset*, Gyldendal. 川崎一彦監訳・高倉尚子訳『光を求めて』(東海大学出版会、一九九九年)。
- Pedersen, O.K. (1993), The Institutional History of Danish Polity, in: Sv-E.Sjøstrand (ed.), *The Institutional Change: Theories and Empirical Findings*, M. E. Shape.
- Scharling, C. I. (1947), *Grundtvig og Romantiken*, Gyldendal.
- 清水満他 (1993)『デンマークで生まれてフリースクール、フォルケホイスコーレの世界』(新評論)。
- — (1972), *N. F. S. Grundtvig*, Det Danske Selskab, 渡部光男訳『北方の思想家、グルントヴィ』(杉山書店、一九八七年)。
- 戸坂潤 (1935)『日本イデオロギー論』(岩波文庫)